

ともの家 だより

令和2年12月第63号

発行 社会福祉法人ともの家

＜いかに障害が重くとも尊厳ある生活を保障する＞

※2020年6月、理事会にて理事長の交代が承認されました。遅くなりましたが、新・理事長に就任にあたっての思いを語っていただきます。

理事長就任のご挨拶

理事長 永和 志野

このたび、永和淑子の後任として理事長に就任いたしました永和志野です。

横浜市で小学校の教員を11年間務め、その後平成27年度から、ともの家の事務長を5年間務めておりました。事務長時代の経験をもとに、ともの家の発展に努力いたしますので、皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。



近年、介護業界を取り巻く環境は非常に厳しいものとなっています。少子高齢化を背景とした「財源逼迫」「人手不足」という従来の2大問題に加え、新型コロナウイルスの猛威が世界を襲いました。令和2年4月には、松山市内のサービス付高齢者向け住宅で、介護施設としては県内初の感染者が発生し県内の事業者には大きなショックを与えました。そこでは、介護にあっていた職員の全員が濃厚接触者として自宅待機指示が出され、代替職員の確保は困難を極めたといえます。利用者へのサービスは停滞し、その後も中傷被害に悩まされるなど、新型コロナウイルスが介護事業者と利用者にもたらすダメージの大きさや対応の難しさが浮き彫りになりました。

ともの家も、お花見の縮小や合同バーベキューの中止、外出活動の自粛など、例年行事や普段の活動に影響が出ました。高齢者にとっては、一日一日が貴重な時間であるにも関わらず、様々な場面で自粛を余儀なくされる日々です。影響は職員の生活にも及んでおり、学校の休校措置に伴い、仕事を休まざるをえない職員や、県外の家族に会えない職員も出てきています。

高齢者は重症化するリスクが高く、また身体接触が必須なためクラスターが発生しやすいという点から、感染予防は絶対に疎かにしてはいけません。しかしながら、過度に感染を恐れ、室内に籠るだけの生活では、「人生最大のバカンス」である老年期を有意義に過ごすことなどできません。ですから、感染予防をしっかりと行いながら、日々を楽しむ活動を職員たちは考え、実践してくれています。

先日、ともの家吾も紅が近所の公園で運動会を行うというので、アンジュールともの家の入居者2名をお連れして参加しました。例年よりも小さい規模でしたが、それでも十分に楽しめる内容でした。パン食い競争では、隣の人のパンを奪う方や走りながらパンに飛びつく方など様々。玉入れでは、持てるだけの玉を両手いっぱいを持ち、終了の合図の後も投げ続ける方など。競技の後は、利用者様と一緒に作ったお弁当をみんなで食べたそうです。よく晴れた秋の空の下、皆さん童心に戻られたようなたくさんの笑顔。また、アンジュールともの家は、2班に分けて、動物園へ遠足に出かけました。私も車いすを押す係として参加しましたが、到着して車を降りた途端、重度の認知症であるAさんが発した言葉…「まあ、空がこんなにきれい！木々もこんなに色づいて…」

我々が理念として掲げる「尊厳ある生活」とは、自由の中でその人らしく生きることであり、自然に触れ四季の移ろいを感じながら生きることであり、自らの身体機能を生かして自由に動くことであり…。それは、室内に籠っているだけでは実現できない生活です。

ともの家は、父である永和良之助初代理事長が、「福祉の名に値する介護」「人間として尊敬し相手の人権を守るケア」を実践するために生まれました。創立から20年が経ちましたが、過去の事業所日より等を読み、これまでの取組を振り返っても、自由の中に個の尊厳を見出し、お年寄りに寄り添い、その夢をかなえようと努めてきたのがわかります。愛媛県では、11月に新型コロナウイルスの感染者数が過去最高を更新しまし

た。それに伴い、感染症対策のステージを1段階上げました。しかし、年末行事であるクリスマス会や大掃除、もちつきなどは、形を変えて実施していきます。困難な時代を迎えたとしても、ともの家の歩みが変わることはありません。職員一同、力を合わせ、ともの家らしくあり続けようと思います。

職員リレーエッセー ⑦

アンジュールともの家 田所 浩二



今年度からアンジュールに配属されました田所浩二です。以前は市内の大型の特養で5年程働いていました。100人以上の利用者さんが生活するお手伝いをさせていただき中で、入所から看取りまで、様々なことを学ばせてもらいました。その経験を活かしてともの家に貢献できたらと思っています。グループホームでの勤務は初めてで慣れないことも多く、周囲に迷惑をかけてしまうこともあります。少しでも多くの利用者さんに喜んでもらえるよう、精一杯頑張ります。よろしくお願いします。

前号の「ともの家だより」を読んで、敬語に対する考え方が大きく変わりました。私はこれまで、お互いが良しとするのであれば、敬語を使わなくても良いのではないかと、信頼関係をしっかりと構築した後でなら、あえて崩れた言葉を選んだ方が良い場面もあるはずである、と考えていました。しかしそれは考えが浅かったのだと思いました。敬うこと、その人を尊重するということは、老いを認めるということ、その延長線上に死の問題があるというのを読んだ時、とてもしっくりと自分の中で納得できました。同時に自分のこれまでの人との接し方を改めるべきだと思いました。今後はより深く尊重するという事について考え、行動していきたいと思っています。

災害から身を守る

事務職員 中村 嘉孝

『災害は忘れた頃にやってくる』とは、高知出身の物理学者で随筆家だった寺田寅彦の言葉です。阪神大震災以降、日本列島は地震の活動期に入ったとも言われ、近年、地域・季節を問わず、大小多くの地震に見舞われています。加えて、温暖化の影響からか、「未曾有の」とか「〇〇年に一度」というフレーズとともに、各地を襲う台風や豪雨・土砂災害が頻発し、予報や避難情報の住民への出し方、行政の防災対策自体も見直しされています。

社会福祉施設では、火災だけでなく、台風や豪雨などの風水害、地震などから利用者の皆様を守る各種防災計画をつくること、防火設備を整備し、年間2回の訓練を行うこと等が定められています。ともの家の各事業所でもそれぞれ防火・防災計画を作り、定期的に訓練を行っています。

ともの家に通われる高齢者の皆様には、ご自宅で万が一被災された場合の想定をしておくことも大切です。市が全戸配布しているハザードマップ（市のホームページでも確認できます）や避難行動判定フローを活用し、ご家族で避難についての話し合いを行ってみてはいかがでしょうか。分からない点、不安な点がありましたら、担当のケアマネージャーに何なりとお尋ねください。

介護ひまなし日記 ⑦



ともの家吾も紅 永和 里佳子

私は毎年、なぜか手袋を片一方だけ無くしてしまう。昨年も内側にボアがついている黒い手袋をどこかにやってしまった。冬が終わると、片手だけの手袋を見てため息をつく。そして無くしたもう一方のことを思う。道端に落ちているのだろうか、ごみとして片付けられたのだろうか。ふと、今年の冬はいつも以上になくしたものに思いをはせることが多いような気がする。

ウイルスというものは目に見えないだけに厄介だ。どこに浮遊しているのか、付着しているのかもわからない。近所で、なじみの店で、すぐ隣で話し

ている人が罹患していないとも限らない。「〇〇で感染者が出た」と耳にすると、なんとなくその場所に近寄りたくない気持ちがする。自分たちだけは無事でいたい、というエゴが心の中に偏在する。

しかし「ウイルスから身を守る」ために人生の残り時間の少ない人から楽しみを奪うのは正しいのだろうか。味わわずに済む苦しみは避けたいが、安全でさえあれば事足りるのであれば、マズローの五段階欲求説は意味がない。特に、認知症介護においては自由であることが必要であり、一所に閉じこもる（閉じ込める）ことは難しいのである。

ともの家吾も紅では、去年は事業所単位での“夏祭り”“敬老会”“運動会”を行った。本来なら、全体行事として毎年行われるはずのものだった。「コロナの感染流行により」中止することもできた、現に色々な催しがそれを理由に規制されている。なぜ中止しなかったか。私の中に、“やめるのは簡単だが、続けることは難しい”という故理事長永和良之助の言葉があった。制約が多い中でどうやれば実現できるのか。それを考えるときに人間はフルに頭を働かせる。介護にかける手間暇を惜しんではならないと思っている。常に知恵を絞り、全身全霊で問題に取り組む。難題こそ避けずに立ち向かわねばならない。特にこだわったのは「戸外」だった。夏の夕暮れ、日が傾きだした頃に肌で感じるふとした涼。どこまでも高く真っ青な秋の空の下で流す心地よい汗。生きている証のように命を燃やしながら紅くまたは黄金色に色づいた木々の葉。それらを皆さんと感じたいと思う。バーチャルではだめなのだ。「ここに生きている」ことを実感するためには、暑さ寒さを作り出す気温や湿度、花の匂い、鳥のさえずりや子どもたちの声が必要だ。また隣の人の手ぬくもりも。来年同じ顔触れで来られるかどうかわからない。だから今の感動を共有することが大切になる。

付け加えるならば実行するためには助けが必要である。今までなら地域の人やボランティアさんに声をかけられた。今年はそれができないなか理事長始め、たくさんの職員が活動に賛同し手伝ってくれた。ありがたいことだと思う。

先日NHKで「ひきこもり」を扱ったドキュメンタリーを見た。ふとしたことでレールを外れてしまった人が、年齢や学歴を理由に社会からはじかれ、自信を失って殻に閉じこもっていく。他者から存在を否定されることの辛さ。どんな人でも生きていていいんだよ、というメッセージを送ると同時に「働

く意味」を思った。誰かから必要とされていると感じること、つまり承認と愛情、そして帰属する先があってこそ人は自己実現できる。介護の目指す高みもそれと同じである。生きている限り人は誰かに必要とされたいのである。認知症があっても、高齢であっても。介護者だけが仕事し、有意義な存在であってはいけない。問うてほしい。あなたは目の前の利用者を必要としていますか？ただの無能な老人にいませんか？お互いに助け合っている存在ですか？

私たちは、「開放」と「閉塞」のぎりぎりのあいまを必死で模索する。気を付けながらもできうる限り平常な暮らしを。並大抵のことではない。困難な時こそ試されていると感じる。ともの家の掲げた旗印が本物かどうかを今こそ皆で実証する時だ。なくした手袋の片割れが戻ってこなくても、暖かかった思い出を胸にこれから訪れる厳しい寒さを乗り越えたいと思う。利用者の皆さんを、ともの家の仲間たちを信じている。

愛読書紹介

職員の皆さんに「愛読書」を紹介していただくコーナー。好評につき第二回目です。

『たましいのケア～病む人のかたわらに』

(藤井理恵・藤井美和共著、いのちのことば社)

推薦者：小規模多機能ホームともの家 末廣 美和

少し古い本だが、内容はいまだに輝きを放つ。初版は2000年。著者の藤井姉妹は一卵性双生児。兵庫県でクリスチャンの家庭に生まれる。理恵さんはもともと薬剤師だったが、病院のチャプレン（牧師）として勤務。美和さんは大学で教鞭をとる。

後者の美和さんとは面識がある。アメリカの留学から帰国された頃だ。日本ではまだ珍しかった「死生学」の草分け的存在だ。その授業内容は斬新で、当時新聞やテレビで取り上げられた。本書で私は彼



女の留学理由を知ることになる。

28歳のキャリアウーマンの彼女をある日病魔が襲う。急性多発性神経炎。麻痺で全身動かないのに、この病気には意識障害がない。本当に大切なものは何か一病む人のたましいの痛みに関わっていききたいという思いを彼女は強くする。

私たちは介護の専門職だ。しかし、ケアを受ける側、与える側というスタンスでは良い関係性は築かれない。「専門性という洋服を脱いで、生身の人間として患者さんの前に立つことができるかーそれが私達にとって一番問われている部分であると思います」と述べている。背筋がピンと伸びる言葉である。

数年前講演のため来松した彼女と再会した。人懐こいあたたかい笑みは変わらず、だった。

～『ともの家だより』63号を読んで～

職員の皆さんに、毎回「ともの家だより」の感想文を提出してもらっています。今回、その中の数人の感想をご紹介します。

・コロナウイルスにより、ここ半年のお年寄りの暮らしにも大きな変化があったことに気づかされた。お出掛けはすてきな行事だ。お年寄りのほりのある表情、わくわくした気分に触れることができる。夏の夕涼みを思い出した。夕方、外で皆と焼きそば、カレーを食べた。耳を澄ますと夏の虫の声。空気が柔らかくなるくらいの夕立が降り、ギター演奏を皆で聴いた。かき氷を食べてキーンとなる。線香花火をして楽しんだ。お年寄りにとって、季節を感じられた良いひとときだっただと思ふ。“今だから”の身近な新鮮なことを一緒に見つけていけたらいいなと思ふ。ディスアビリティとしての視点（その一部としての認知症）、大切なことであるなあと。自然に老いることを、その姿をそばで見守ることを、今まで経験したすべての別れでしてきた。それしかできなかった。私は、そのことに立ち会うのに強さや覚悟がいるように思い、自分には足りないんじゃないかと感じているが、これまで共に過ごした人のかつて家で自然に死んでいったような穏やかさの中で看取

る、という言葉で「本当に大切なこと」と捉えなおすことができた。

(ともの家 吾も紅 曾和 あすか)

・今回の記事はどれも関心を引くものばかりでしたが、やはり一番関心を引いたのはコロナの記事でした。今までできていたことができなくなった事のショックとか、実生活も、子どもの学校休校（学級閉鎖と同じ状態だから外出は控えなさい）もですが、利用者さんが外部との接触や交流ができなくなることによってどんな影響が出てくるのか。実際、家族の面会が中止になって会えない日が続いてくると「家族は死んだ。子どもは死んだんだ」と言い出す方も出てきました。会えない息子さんのことを思いすぎてか「息子が迎えに来たけど私を置いて帰った」と言われる方もいました。自分なりに利用者さんたちが不安な気持ちにならないためにできる事を日々考えています。とりあえず、月初めに行った利用者さんの誕生会でのケーキ作りは楽しんでもらえたようで「また作って」と言われたこともあり、またお祝いのケーキ作りをするつもりです。

(アンジェール ともの家 土手内 洋子)

・多様性というものが認められつつある中で、認知症やパーキンソン病や、身体の不自由や心の病や、そういうことがわが身に降りかかった人々が存在するということを、より多くの人に知ってもらいたい。ノーマライゼーションの推進、いかに障害が重くとも尊厳ある生活を保障する。ともの家の理念は、今後通用する普遍的なものです。それを体現していく我々職員が、最も重んじるべきはやはり接遇だと思います。言語的か非言語か、どちらでも構わない。個人として尊重し、手厚く遇することがケアの第一歩だと思います。

(小規模多機能ホーム ともの家 吉岡 貴志)

※紙面の向上のため、今後も皆様からたくさんの感想をお待ちしております！

.....
編集後記：今回の「ともの家だより」は奇しくも新理事長の挨拶を追随する記事になった。コロナ禍の中で一介護事業所が、一職員が何をできるか模索していきたい。(里)
.....